

産業予備軍の形成

前講で、資本の蓄積につれて資本の「可変的構成部分が不変的構成部分に比べてますます小さくなる」(④一〇七五ページ/六五三ページ)こと、つまり資本の有機的構成が次第に高まることをみてきました。

しかしそれは、あくまで資本の側における蓄積の法則を示すものでしかありません。資本の生産過程は、生産諸手段と労働力との合体として存在するわけですから、資本の蓄積は、反面で労働者の側に何をもちかかみなければなりません。弁証法的に、全面的な考察が求められているのです。

蓄積につれて、資本の総量そのものは増加しながらも、そのなかに占める可変資本部分が相対的に小さくなるということは、労働者に対する需要が、絶対的には増加しながらも生産諸手段の需要に比べ、相対的に低下することを意味しています。

「労働に対する需要は、総資本の大きさに比べて相対的に低落し、しかも総資本の大きさの増大にもなつて累加的に低落する。確かに総資本の増大につれて、その可変的構成部分、またはこの総資本に合体される労働力も増加しはするが、しかし、それは絶えず減少する比率で増加する」(④一〇八二、一〇八三ページ/六五八ページ)。

資本の蓄積により社会の総資本が増大すれば、全体として資本に合体される労働者人口は増大していきます。不破氏は、戦後日本の高度成長期(一九五〇〜八〇年)の三〇年間に、国民総生産は三一兆八千億円から三兆七兆五千億円へと約一〇倍に拡大したのに対応して、労働者人口は一三九万人から三八〇一万人へと約三倍に増えたこと、この爆発的増加を支えたものが、農村にある労働力を都会に移動させる「労働力流動化政策」にあったことを示しています(第三冊一六八ページ)。

いったん農村から離脱し、生産手段を失った労働者は、もう農民に戻ることはできませんから、永久に労働市場にとどまらざるをえません。しかし資本の蓄積は、一方でこうやって労働者を労働市場にどんどん吸引して絶対数では増大させながら、他方で蓄積の増大につれて相対的に過剰となった労働者を労働市場にどんどん吐き出していきます。発展する生産部門と後退する生産部門、産業循環での好況と不況とを繰り返しつつ、蓄積された社会資本は、全体として新たに労働市場に労働者を引き寄せ、労働者人口を絶対的に増大させつつ、他方でこれまで吸引していた労働者を吐き出して、彼らを相対的に過剰な労働者人口に転化するのです。

「資本主義的蓄積が、しかもこの蓄積の活力と大きさに比例して、相対的な、すなわち資本の増殖欲求にとつて余分な、それゆえ過剰または余剰な労働者人口を絶えず生産するのである」(④一〇八三ページ/六五八ページ)。

こうして小生産者は、たえず自己の生活基盤から追われて労働者に転化することを余儀なくされながら、いったん労働市場に放り込まれると常に産業予備軍に回されかねない不安にさらされることになるのであり、マルクスは、この相対的過剰人口を、「資本主義的生産様式に固有な人口法則」(④一〇八四ページ/六六〇ページ)だといっています。

この相対的過剰人口は、資本主義的生産様式にとつて決定的な役割を果たすこととなります。

「過剰労働者人口が、蓄積の——または資本主義の基礎上的の富の発展の——必然的な産物であるとすれば、この過剰人口は逆に、資本主義的蓄積の槓杆、いやそれどころか資本主義的生産様式の実存条件となる」(④一〇八七ページ/六六一ページ)。

蓄積が過剰人口を生みだし、過剰人口が蓄積を生みだす。原因が結果となり、結果が原因となる。これは交互

作用とよばれる弁証法です。

こうした過剰人口は、「あたかも資本が自分自身の費用によって飼育でもしたかのようにまったく絶対的に資本に所属する、自由に処分できる、産業予備軍を形成する」(同)のです。

産業予備軍は、産業循環のなかで、資本が労働者人口の自然的諸制限に制約されることなく、その必要に応じて伸縮自在に運動することを可能にするものとなるのです。

「近代の産業の特徴的な生活行路——すなわち、……一〇カ年の循環という形態は、産業予備軍または過剰人口の不断の形成、大なり小なりの吸収、および再形成に立脚する。産業循環の浮き沈みは、それがまた、過剰人口に新兵を補充し、そのもつとも精神的な再生産動因の一つとなる」(④一〇八八ページ／六六一ページ)。

資本主義的蓄積の一般的法則

産業予備軍の形成は、労働者の側に失業・半失業をもたらすというだけの問題ではありません。それは、現役労働者群も含む、労働者階級全体の運命を左右することになります。

その問題に立ち入るためにも、産業予備軍の実態をもう少し詳しくみてみると、それは大きく四つの形態に分けることができます。

一つは、流動的過剰人口であり、産業循環や生産手段との関係で、資本に吸収されたり、反発されたりする過剰人口です。

二つは、潜在的過剰人口であり、農村で農業に従事しながら、就業の機会を待っている半農半労の予備軍です。三つは、停滞的過剰人口です。「現役労働者軍の一部分をなすが、しかしまったく不規則な就業のもとにあ

る」(④一一〇四ページ／六七二ページ)、パートやアルバイトなどの不安定雇用労働者のことであり、「彼らは資本の独自の搾取部門の広大な基礎」となり、「最大限の労働時間と最小限の賃銀が彼らの特徴をなす」(同)。

四つは、「相対的過剰人口の最深の沈殿物」である「受救貧民」(④一一〇五ページ／六七三ページ)です。マルクスは、「受救貧民は、現役労働者軍の廃兵院を形成し、産業予備軍の死重を形成する」(④一一〇六ページ／同)といっています。

資本の蓄積、社会的富の増大、「したがってまたプロレタリアートの絶対的大きさおよび彼らの労働の生産力、これらが大きくなればなるほど、それだけ産業予備軍が大きくなる。……この予備軍が現役の労働者軍と比べて大きくなればなるほど、固定的過剰人口、すなわち彼らの労働苦がなくなるのに反比例して貧困が増大していく労働者諸層が、それだけ大量となる。最後に、労働者階級中の貧民層と産業予備軍とが大きくなればなるほど、公認の受救貧民がそれだけ大きくなる。これこそが資本主義的蓄積の絶対的・一般的な法則である」(④一一〇六、一一〇七ページ／同、六七四ページ)。

いわば、産業予備軍の最下層に位置する受救貧民の存在がおもりとなり、現役労働者全体の状態を下へ下へと引きずりおろしていくのです。それを「資本主義的蓄積の絶対的・一般的な法則」といいたったところに、ついに資本主義的生産様式の運動の本質にまで接近するに至ったマルクスの自信と澄み切った怒りの眼差しをみる事ができます。

これに続いて、歴史的名文ともいえるべき資本主義的蓄積の定式化が展開されます。これは、産業予備軍の存在がテコとなって展開される「資本主義的蓄積の絶対的・一般的法則」の展開ともいえるべきものです。

「それゆえ資本が蓄積されるにつれて、労働者の報酬がどうであろうと——高かろうと低かろうと——労働

者の状態は悪化せざるをえないことになる。最後に、相対的過剰人口または産業予備軍を蓄積の範囲と活力とに絶えず均衡させる法則は、ヘアイトスの楔くわがプロメテウスを岩に縛りつけたよりもいっそう固く、労働者を資本に縛りつける。この法則は、資本の蓄積に照応する貧困の蓄積を条件づける。したがって、一方の極における富の蓄積は、同時に、その対極における、すなわち自分自身の生産物を資本として生産する階級の側における、貧困、労働苦、奴隷状態、無知、野蛮化、および道德的墮落の蓄積である」(④二〇八ページ/六七五ページ)。

第一部「資本の生産過程」の弁証法・まとめ

マルクスが、資本主義的生産様式の叙述に使用したのは弁証法的方法でした。それは対立物の統一を軸としながら、単純なものから複雑なものへと発展していく「萌芽からの発展」として示されるものです。

まず第一部「資本の生産過程」は、資本主義社会の「富の要素形態」としての商品を、使用価値と価値という対立物の統一としてとらえるところから始まりました。商品の内部における使用価値と価値の対立は、商品と貨幣という外的対立に転化します(第一篇)。「内と外」との弁証法です。貨幣の一定量の蓄積は、貨幣を資本に転化しました。「量から質への転化」という弁証法でした。

商品流通と資本の流通の対比という、或るものその他のものの弁証法をつうじて、資本の本質は、剰余価値の取得にあることが明らかにされました。ではどこからその剰余価値が生まれるのか。それは流通のなかで発生しなければならぬと同時に流通のなかで発生してはならない、という矛盾の解決を迫られる弁証法的問題であり、その矛盾の解決として労働力という商品の売買がとらえられます(第二篇)。

したがって、資本のなかにも、新しい価値を生みだすか否かに応じて、可変資本と不変資本の区別が必要になるとが明らかにされ、搾取の度合いは、剰余価値率($m-v$)として示されることとなります(第三篇)。

次いで、剰余価値の増殖方法として、絶対的剰余価値の生産と、相対的剰余価値の生産という二つの方法、またこの二つの方法を統一した労働の強化がとらえられます(第三篇)。

資本は絶対的剰余価値の生産のもつ「制限」を打ち破り、相対的剰余価値の生産のために生産力発展の「当為」を目指します。その結果、協業、マニユファクチュア、機械制大工業へと生産力は発展し、機械制大工業において資本主義的生産様式が確立していくこととなります。道具から機械への移行による生産力の発展は、質的転換が量的飛躍を生み出すという「質から量への移行」という弁証法を示しています(第四篇)。マニユファクチュアから機械制大工業への移行は、「労働者が主役」の生産から、「機械が主役」の生産へと対立物の相互移行であり、この転化により資本の専制支配が確立され、搾取は一層強化されることとなります。こうした考察のうえに、資本主義の本質は、機械制大工業を基礎とし、搾取の強化と生産力の発展を競い合い、個別資本が生き残り競争を強制される生産様式にあることが明らかにされます。本質と現象の弁証法的カテゴリーを使って、事物の真の姿である本質を浮き彫りにしていったのです(第五篇)。

他方、労賃は、労働力の価格という本質を隠し、労働の価格という仮象を生みだします。ここでは「本質と仮象」という弁証法のカテゴリーがとりあげられています。労賃は、搾取をおおい隠し、資本主義の神秘化を生み出すと同時に、労働力の価値以下への引き下げを可能にします(第六篇)。

続いて、資本を固定し、静止したものとではなく、それ自身制限を打ち破り、当為を目指す運動する主体としてみていきます。この「静止と運動の統一」も弁証法の見地です。自己増殖する資本は、その本質からして

生産力を発展させるために資本の蓄積を行います。

剰余価値の生産が資本主義的生産様式の本質であるのに対し、「蓄積のための蓄積、生産のための生産」(④一〇二ページ/六二二ページ)は、その本質が現象したものであり、ここにも「本質と現象」の弁証法というカテゴリーが示されているのです。

さらに、資本主義的蓄積は、商品の生産・交換の法則を資本主義的取得法則に転換します。これも対立物の相互移行の例としてみることができます。その結果、資本家と労働者の対等・平等な人格相互間の等価交換という出発点の美しく理念的な姿はいまやすっかり影をひそめ、それに代わって冷厳な資本主義的取得法則という現実が登場することになりました。

資本の蓄積は、産業予備軍の存在をテコとして、一方の極における資本の蓄積と他方の側における貧困、労働苦、奴隷状態、無知、野蛮化、および道徳的墮落の蓄積という対立・矛盾する関係を生みだします。これが資本主義的蓄積の絶対的・一般的法則のあらわれなのであり、この法則の支配によって資本家と労働者の階級的対立が鮮明になってきます(第七篇)。

こうして、第一部「資本の生産過程」は、商品という「萌芽」から出発し、その弁証法的展開をつうじて、資本の蓄積と貧困の蓄積という資本主義的矛盾が生みだされることを明らかにし、「資本主義的生産様式の敵対的性格」(④二〇ページ/二二二ページ)を浮き彫りにするところまで「萌芽からの発展」をとげることができました。

第一部「資本の生産過程」は、大きな論理展開としてはこのように締めくくられることとなりますが、こうしてふりかえってみますと、なぜマルクスがわざわざ「あと書き(第二版への)」のなかで資本論で用いられた方法について言及し、それが弁証法的方法であると述べているのか、を理解できるのではないのでしょうか。『資本論』の最終目的は、資本主義社会の「経済的運動法則を暴露すること」(④二二ページ/一六六ページ)にあります。マルクスは、まず弁証法を使って「研究」し、「新しい成果を見いだすため、既知のものから未知のものへと前進」(全集④一四〇ページ/『反デュリング論』上、一九二ページ)し、ついに資本主義的蓄積の絶対的・一般的法則という「運動法則」を明らかにすることができたのです。

そして今度は、この「研究」の成果のうえに立って、研究の際に使用された弁証法を、「叙述」の方法としても使用することにより、制限と当為の弁証法をつうじて、「富の基本形態」から始まり「萌芽からの発展」として資本蓄積の一般的法則にまでたどりつくことができたのです。

マルクスは、『資本論』の弁証法的方法に関連して、先の「あと書き」のなかで、次のようにのべています。「もちろん、叙述の仕方は、形式としては、研究の仕方と区別されなければならない。研究は、素材を詳細にわがものとし、素材のさまざまな発展諸形態を分析し、それらの発展諸形態の内的紐帯(ちゅうたい)をさぐり出さなければならぬ。この仕事を仕上げのちに、はじめて、現実の運動をそれにふさわしく叙述することができる。これが成功して、素材の生命が観念的に反映されれば、まるである「先験的な」構成とかかわりあっているかのようになり、思われるかもしれない」(④二七二ページ/二七二ページ)。

マルクスの言いたいことは、研究の方法にも叙述の方法にも弁証法を駆使したということなのです。弁証法的方法を使用して「研究」したから、資本主義という素材の「発展諸形態の内的紐帯」である資本主義的蓄積の一般的法則を解明することができたし、制限と当為の弁証法的方法を使用して「萌芽からの発展」として商品から資本主義的蓄積の一般的法則に至る発展の諸形態を「叙述」したから、素材に生命を与え、「まるである」先験

的な「構成とかかわりあっているかのよう」に「一つの芸術的全体」に仕上げることができた、ということだろうと思います。

まさに、『資本論』は、弁証法的方法を抜きにしては存在しえなかったものであり、その意味からするとレーニンのいうように、マルクスは、「『資本論』の論理学」（レーニン全集^⑧二八八ページ／『哲学ノート』二八八ページ）を残したのです。

本源的蓄積

第二章の「本源的蓄積」というのは、歴史上いかにして資本主義の出発点となる資本家と労働者とが蓄積されていったのかを、みていこうとするものです。

資本主義が成立するためには、一方で一定の貨幣量をもつ資本家が存在すると同時に、他方で、労働力の売り手たる労働者が存在し、しかも両者がともに合体を求めあうことが必要となります。

まず、労働者についていうと、二重の意味で自由な労働者の存在が必要となります。

「貨幣を資本に転化させるためには、貨幣所有者は商品市場で自由な労働者を見いださなければならぬ。ここで、自由な、と言うのは、自由な人格として自分の労働力を自分の商品として自由に処分するという意味で自由な、他面では、売るべき他の商品をもっておらず、自分の労働力の実現のために必要ないっさいの物から解放されて自由である」という意味で自由な、この二重の意味でのそれである」（^②二八九ページ／一八三ページ）。

しかし、これまでのマルクスの叙述からすると三つ目の条件が必要であるように思えます。それは、二重の意味での自由な労働者が、自発的に労働力を売ることを承諾する、ということですが。それがないと、いくら資本が

求めようとしても、自由な労働力は資本に合体されることがないからです。

『自由な』労働者が、資本主義的生産様式の発展の結果、彼の習慣的な生活諸手段の価格と引き換えに、彼の活動的な全生活時間を、いな彼の労働能力そのものを売ることを、……自発的に承諾するようになるまでには、すなわち社会的に強制されるようになるまでには、数世紀かかっている」（^②四六七ページ／二八七ページ）。

そのために、一八世紀中葉すぎに至るまでのイギリスの労働者規制法は、一方で労賃の上限を定めて規制し、他方で労働日を強制的に延長して、労働者に対し、労働力という商品を売る意志を国家的に強制して、労働者をつくり出していったのでした。

これに対して、資本家が資本家として歴史の舞台に登場するための条件は、ただ一つ、一定量の貨幣の蓄積だけではないかもしれません。

重要なことは、資本家と労働者とは、歴史上ほぼ同じ時期に登場してくるのでなければ両者の合体は不可能だということですが。いくら資本家が蓄積した貨幣の所有者として存在していても、労働者がいなければ資本主義的生産をすることはできませんし、他方、労働力以外に生産手段をもたない労働者も、その買い手である資本家がいなければ労働力を売ることができません。

では、資本家と労働者とは、歴史上偶然にも同じ時期に登場したのでしょうか。しかし、そんな偶然的な同時発生はありません。この本源的蓄積という資本主義の前史の段階でも、資本主義的蓄積の一般的な法則と同様の蓄積の法則が働いています。すなわち、一方の極での資本の蓄積と他方の側での貧困の蓄積であり、それは農村の自営農民や小生産者における「生産者と生産手段の統一」を破壊し、生産者を生産手段から分離するという弁証法的方法によっておこなわれたのです。

「いわゆる本源的蓄積は、生産者と生産諸手段との歴史的分離過程にほかならない。それが『本源的なもの』として現われるのは、それが資本の、そしてまた資本に照応する生産様式の前史をなしているためである。資本主義社会の経済構造は封建社会の経済構造から生まれてきた。後者の解体が前者の諸要素を遊離させたのである」(④一二二四ページ／七四二、七四三ページ)。

このような封建社会の解体、つまり生産者である農民から生産諸手段である土地を分離する過程は、決して平穩無事にすんだわけではありません。マルクスは、「彼らの収奪の歴史は、血と火の文字で人類の年代記に書き込まれている」(④一二二五ページ／七四三ページ)と書き記しています。

イギリスの農民から土地をとりあげるきっかけとなったのは、「一五世紀の最後の三分の一期から一八世紀末まで」(④一二四七ページ／七五六ページ)に展開された「羊毛マニユファクチュアの繁栄とそれに照応した羊毛価格の騰貴」(④一二三〇ページ／七四六ページ)でした。このため「耕地の牧羊場への転化」(同)が強行され、農民は羊に追い出されることになったのです。

羊毛マニユファクチュアに乗り出した借地農場経営者や都市ブルジョアは、「巨大な教会領の盗奪」(④一二三四ページ／七四九ページ)、「国有地の盗奪」(④一二三九ページ／七五一ページ)、「共同地囲い込み」(④一二四一ページ／七五三ページ)などの手段で牧羊場を手に入れ、そこで土地とともに生活していた農民を追い出してしまったのです。

「農耕民からの土地の最後の大収奪過程は、いわゆる『地所の清掃』(実際は地所からの人間の掃き捨て)」(④一二四八ページ／七五六ページ)といわれるものでした。サザランド公爵夫人は、「全州を、牧羊場に転化しよう」と決意した。一八一四年から一八二〇年までに、これら一万五〇〇〇人の住民、約三〇〇〇戸の家族は、組織

的に狩り立てられて根こそぎにされた。彼らの村落はすべて破壊されて焼き払われ、彼らの耕地はすべて牧場に転化された」(④一二四九ページ／七五八ページ)。

その後牧羊場の一部は、貴族の狩猟場に再転化されますが、それは何ら事態を改善するものではなく、「鹿猟林と人民とは共存することはできない」(④一二五三ページ／七五九ページ)ままとどまっているのです。

この呵責^{かしやく}ない農村民からの土地とりあげの結果として、「土地を資本に合体させ、都市工業のためにそれが必要とする鳥のように自由なプロレタリアートの供給をつくり出した」(④一二五七ページ／七六一ページ)のですが、マルクスにいわせると、「これらはみないずれも本源的蓄積の牧歌的方法」(同)にすぎませんでした。

というのも、これに続いて、「被収奪者にたいする流血の立法」(④一二五八ページ／同)が待ちかまえていたからです。

「鳥のように自由なこのプロレタリアートは、それが生み出されたのと同じ速さでは、新たに起こりつつあるマニユファクチュアに吸収されることはできなかった。……彼らは大量に乞食や盗賊や浮浪人に転化した。……一五世紀末から全一六世紀にわたり、西ヨーロッパ全体で浮浪罪にたいする流血の立法が行なわれた。こんにちの労働者階級の祖先は、なによりもまず彼らの余儀なくされた浮浪人化と受救貧民化のために罰せられた」(④一二五八ページ／七六一、七六二ページ)。

彼らは土地から追い出され、やむなく大量に乞食や浮浪人に転化したものであるにもかかわらず、労働の意志がないものとみなされ、重罰をもって賃金労働者となることを強制されたのです。

「こうして、暴力的に土地を収奪され、追放され、浮浪人にされた農民は、グロテスクで凶暴な法律によって、鞭打たれ、烙印を押され、拷問されて、賃労働制度に必要な訓練をほどこされた」(④一二六二ページ／七六

五ページ)。

勃興しつつあるブルジョアジーが、労働者に対し、資本への従属を求めるために国家権力を利用したことは、「本源的蓄積の本質的な契機」(④一二六三ページ/七六六ページ)なのです。労働者規制法、団結禁止法などもそのあらわれの一つです。

こうした農民のプロレタリアート化は、他方で借地農場経営者を農業資本家に転化させ、産業資本家を誕生させることとなります。

「一五世紀の最後の三分の一期に始まり、ほとんど一六世紀全体……にわたって続いた農業革命は、農村民を貧しくすると同じ速さで借地農場経営者を富ませしていく。共同牧場などの横奪によって彼らはほとんどただで自分の家畜をおおいにふやすことができ、他面、この家畜は土地耕作のためのいっそう豊富な肥料を彼に提供する」(④一二七二ページ/七七一ページ)。

追放された農民の一部は、「大借地農業経営者の日雇い労働者に転化」(④一二七七ページ/七七四ページ)していくと同時に、かつての自給自足の生活を営んでいた状態から、商品購入者に転化し、産業資本家のための国内市場をつくり出すのです。

「大工業がはじめて、機械によって資本主義的農業の恒常的な基礎を与え、農村民の巨大な大多数を徹底的に収奪し、家内の・農村的工業——紡績と織物——の根を引き抜いて、それと農業との分離を完成する。それゆえまた、大工業がはじめて、産業資本のために国内市場全体を征服する」(④一二八一ページ/七七六、七七七ページ)。

しかし、それはまだ端緒となつたにすぎず、産業資本家は、さらに新天地・植民地の略奪によって爆発的に成長していくこととなります。

「アメリカにおける金銀産地の発見、原住民の絶滅と奴隷化と鉱山への埋没、東インドの征服と略奪の開始、アフリカの商業的黒人狩猟場への転化、これらが資本主義的生産時代の曙光を特徴づけている。これらの牧歌的過程は本源的蓄積の主要な過程である」(④一二八五ページ/七七九ページ)。いうまでもなく、ここにいう「牧歌的過程」とは、マルクスの皮肉以外の何物でもありません。

以上、結合していた生産者と生産諸手段とが分離することによって、「一方の極では社会的な生産手段および生活手段を資本に転化させ、反対の極では人民大衆を賃労働者に」(④一三〇〇ページ/七八八ページ)転化させる歴史的過程を総括して、マルクスは、「資本は、頭から爪先まで、あらゆる毛穴から、血と汚物とをしたらせながらこの世に生まれてくる」(④一三〇一ページ/同)と、そののろわれた誕生を記しています。

否定の否定——社会主義・共産主義への移行の必然性

マルクスは、本源的蓄積の最後を、第一部「資本の生産過程」全体を総括する、「資本主義的蓄積の歴史的傾向」という節でまとめていますが、ここにもまた見事な弁証法的展開が示されています。

エンゲルスは、『反デューリング論』のなかで、この箇所をとらえ、ここには、「否定の否定」という弁証法的な過程が示されているといっています(全集②一三八ページ以下/『反デューリング論』上、一九一、一九二ページ)。

「否定の否定」というのは、エンゲルスが弁証法の三つの基本法則に掲げている、「自然、歴史および思考のきわめて一般的な、まさにそれゆえにまたきわめて広く作用している重要な発展法則」(同一四六ページ/同二〇

○ページ)です。つまり事物が発展していくということは、古いものを保存しつつ、否定し、より高度なものに発展することを反覆する「否定の否定」というらせん形の発展をたどることを意味しています。否定を二回くり返す「否定の否定」により、一見すると古いものがそのまま復活したかのようにみえながらも、実際には、より高度のらせん形の発展として古いものがあらわれてくるのです。

さて、資本主義的蓄積の出発点となるのは、生産者と生産諸手段とが結合した「小経営」です。小経営では、「労働手段と労働の外的諸条件とが私人に属する」(④一三〇三ページ／七八九ページ)とことから、労働生産物も生産者が取得します。生産者は自己の労働にもとづき、生産物を所有(私的所有)するのであり、「所有と労働との結合」です。

ヘーゲルは、『法の哲学』第四四節において、人間の本质は自由な意志をもっていることにあり、人間は、労働をつうじて意志をもたない労働対象に自己の自由な意志を「置き入れる」ことによって、その物件を自分のものにする権利、所有権を取得するのだといっています。つまり、自己の労働にもとづく生産物の取得を、自由な意志をもつ人間の本質にかかわる問題だととらえているのであり、この点はマルクスにも継承されている重要な点だと思えます。

しかし、小経営から資本主義的生産に移行することにより、生産者と生産手段とは分離することによって、「所有と労働との分離」が生じるのであり、これが、私的所有の「最初の否定」となるものです。

マルクスが、これを「商品生産の所有法則の資本主義的取得法則への転換」(④九九三ページ／六〇五ページ)とよんでいることは、第六講で紹介しました。

「商品生産および商品流通にもとづく取得の法則または私的所有の法則は、明らかに、それ独自の内的で不可避的な弁証法によって、その直接の対立物に転換する」(④一〇〇〇ページ／六〇九ページ)。
もはや生産者は、生産手段から分離されることによって、自己の労働にもとづく生産物を取得しえなくなってしまうのです。

「自分の労働によって得た、いわば個々独立の労働個人とその労働諸条件との癒合にもとづく私的所有は、他人の、しかし形式的には自由な労働の搾取にもとづく資本主義的私的所有によって駆逐される」(④一三〇四、一三〇五ページ／七九〇ページ)。

資本主義的収奪は、資本主義的蓄積をつうじて「少数の資本家による多数の資本家の収奪」(④一三〇五、一三〇六ページ／同)へと発展し、資本独占を生みだします。

「資本独占は、それとともにまたそれのもとで開花したこの生産様式の桎梏しごくとなる。生産手段の集中と労働の社会化とは、それらの資本主義的な外被とは調和しえなくなる一点に到達する。この外被は粉碎される。資本主義的私的所有の吊鐘が鳴る。収奪者が収奪される」(④一三〇六ページ／七九一ページ)。

「桎梏」というのは、「手かせ足かせ」のことです。一言一句つけ加える必要のない希代の名文であり、またこの箇所には、資本主義の基本矛盾をどうとらえるのかに関し重要な指摘もおこわれています。ここは、とりあえず、資本独占が、資本主義から社会主義・共産主義への移行を必然的なものにせざるをえない、という結論のみを確認して、先を急ぐことにしましょう。

「資本主義的生産様式から生まれる資本主義的取得様式は、それゆえ資本主義的な私的所有は、自分の労働にもとづく個人的な私的所有の最初の否定である。しかし、資本主義的生産は、自然過程の必然性をもってそれ自身の否定を生み出す。これは否定の否定である。この否定は、私的所有を再建するわけではないが、しかし、資

本主義時代の成果——すなわち、協業と、土地の共有ならびに労働そのものによって生産された生産手段の共有——を基礎とする個人的所有を再建する」(同)。

デューリングは、この箇所をとらえて「個人的であると同時に社会的でもある所有というもうろう世界」(全集②一三六ページ)、『反デューリング論』上、一八六ページ)だと批判しました。

これに対し、エンゲルスは、「この文章は、社会的所有にはいるのは土地その他の生産手段であり、個人的所有にはいるのは生産物すなわち消費対象である、ということの意味する」(同一三七ページ/同一八七ページ)として、デューリングの「もうろう世界」を再批判したのです。つまり「所有と労働の分離」を今一度否定した、否定の否定としての「所有と労働の結合」が実現されるのです。

日本共産党新綱領も、この趣旨を受けて、「社会化の対象となるのは生産手段だけで、生活手段については、この社会の発展のあらゆる段階を通じて、私有財産が保障される」としています。

このようにマルクスは、小経営——資本主義——社会主義・共産主義を、肯定——否定——否定の否定としてとらえているのですが、別の側面からみると次のような否定の否定でもあります。

すなわち、小経営では「個人的生産と個人的取得」、それを否定した資本主義では、「社会的生産と個人的(資本主義的)取得」、否定の否定としての社会主義・共産主義では、「社会的生産と社会的取得」ということになります。

エンゲルスは、科学的社会主義を代表する古典、『空想から科学へ』のなかで、マルクスのこの箇所をうけて、資本主義の基本矛盾を「社会的生産と資本主義的取得」(全集①二二〇ページ)、『空想から科学へ』六八ページ)としてとらえています。

資本主義の基本矛盾をこのようにとらえることによって、その矛盾の解決としての社会主義・共産主義が、「社会的生産と社会的取得」にあることが明らかにされたのです。

なお資本主義の真の制限と基本矛盾の問題は、第二〇講のまとめで整理してお話しする予定です。